DOI：10.20776/S24326291-7-P57

『日華学報』誌から見る満州事変前後の中国人留日学生をめぐる動向

見城　悌治
千葉大学大学院国際学術研究院

Trends of Chinese students studying in modern Japan before and after the Manchurian incident as seen in the magazine Nikka Gakuhō

KENJO Teiji

要旨

近代日本で学んでいた中国人留学生の支援団体の一つに日華学会（1918年創立）がある。同会が1927年から1945年まで発刊していた雑誌『日華学報』には、同会（日本）の見解や意向だけでなく、留学生の生の声もしばしば掲載されていた。

本稿は、1931年９月に起こった満州事変を前後する時期（１年半余）に発刊された同誌の論説中の特色的なものを分析するなか、日華学会と中国人留学生が「日中連携」という「理想」に向かい、歩みを同じくするかに見える局面が一時的に現出したことを明らかにした。しかしながら、一方で両者の懸隔は否定できず、また共通するかに見えた「理想」のなかに人種対立を煽りかねない危険性も含まれていたことを指摘した。

キーワード
満州事変、中国人留学生、日華学会、日華学報、留学生教育、黄禍論

はじめに

日華学会は、1918年５月、「中華民国人にして、（引用者―日本）帝国に来り留学し、又は教育等に関し、研究調査を為さんとする者の為、諸般の便宜を図る」ことを目的に、渋沢栄一や内藤久寛（日本石油創設者）などの実業家や官僚が設立した団体である。その背景には、21ヶ条要求（1915年）などで、悪化した日中関係の改善をする目論見もあったとされ、後には「外務省対支文化事業」（1923年）からの補助も得た上で、諸活動を展開していく[(1)]。

この団体の活動概要について、1931年７月に常務理事に就任した砂田實[(2)]はこう説明した。「東亜高等予備学校の施設、留学生寄宿舎及会館の経営、学校、留日学生名簿其他の刊行、官公衙並に志望学校への紹介連絡、視察及旅行案内等留日学生諸君並に中華民国の来往士人の為めに日常各般の斡旋に尽力することを主要な任務としてゐる」云々[(3)]。また、ここでは触れられていないが、日華学会からの情報発信として、雑誌『日華学報』の発刊（1927年８月～1945年10月：全97号）は重要である。1931年１月号によれば、同誌の発刊部数は、3,000部であり、「主として日華両国教育関係者に配布し、兼て留学生に分配して、自他の境遇消息に通ぜしめ、更に留学生の統一を図り、向上の資に供せんことを期」[(4)]すとの目的が示されていた。

この『日華学報』誌を用いた学術的な研究は、2005年に大里浩秋が同誌の目次一覧と解説を概略的に示した[(5)]ものの、その後も進んでいるとは言えない。さらに、2013年、大里や筆者などの監修で、2013年に同誌の復刻版が出されたが、研究状況はあまり変わらない。そうしたなか、筆者は復刻版の解説論文をはじめ、複数の研究をしてきた[(6)]。それらに続く本稿は、とりわけ満州事変前後の掲載記事に焦点を合わせ、そこから往時の中国人留学生の生活や社会認識、また事変勃発後の日華学会および留学生の対応を明らかにしていくことを課題とする。より俯瞰的な位置づけをすれば、本研究は、日中関係が激動していく時期における留日中国人学生の動向を明らかにすることを目的に進められるものである[(7)]。

１　満州事変勃発前の『日華学報』誌にみる日本認識

（１）日中連携の呼びかけと留学生対応の不備

まず、満州事変勃発直前の『日華学報』誌（以下、『学報』と略す）に掲載された「巻頭言」のうちから二つを見ていこう。一つ目は、『学報』1930年７月号の所載の論考である。

「一睡千年。黎明は近づけり。亜洲は将に覚めんとす。起って暁鐘を杵くものは誰ぞ。日東帝国の青年なり。中華民国の青年なり。亜洲は世界の大塊。喜馬拉（引用者注―ヒマラヤ）は世界の絶巓。今や此に攀ぢんとするの白人あるを聞く。奮へ矣。日華両国の青年。世界は再び汝等の手に帰せんとす。知らず諸子に此自覚ありや否や。白人をして、喜馬拉

の第一峰に立たしむる勿れ。（略）天運循環。亜洲は将に覚めむとす。東亜の文化は、方に復興の機に立つ。奮へ矣。日華両国の青年諸子。諸子にして奮はずんば、亜洲十億の民衆を奈何にせむや」[8]。

二つ目は、『学報』1931年１月号の「巻頭言」である。

「辛未の年頭に立ち、此に虔みて日華両国国本の万歳を三唱し、興亜の大業に提携邁進を祝り、兼ねて人文の潮流に一脈清新の寄与を致さんことを庶幾ふ。（略）人文は正に一転機。亜洲は真に其の五洲の尤たる陸塊の本義を、文化の上にも顕揚せんとするの運に会してゐる。（略）吾人は留東諸子の勇往直前、中華建設の大業に臨みて、常に他の留学生の追随を許さざるの気塊と、蘊蓄とを養成せられんことを切望に膀へぬ。此の如くにして修養し、此の如くにして祖国の維新に貢献し、此の如くにして復興亜細亜の大業に従事し、我日本の青年と倶に人文の大勢を制して、千年雌伏の意義を世界に証明せられんことを以て年頭の辞となすと云爾」[9]。

前者は、アジアのシンボル・ヒマラヤを白人が占拠しようとするのを、日華の青年の「自覚」によって防ごうとの呼びかけ、後者は、「復興亜細亜」のため、両国青年が手を携えようとの主張である。端的に言えば、日中の青年同士によるアジア連帯（復興）主義の呼号であった。

一方、同誌の寄稿には、日本の大学教員による次の文章も確認できる。「五千年来の両国の文明的交渉の因縁を考へ、我等の祖先が受けた支那文明に対する偉大な恩恵を思ふ時、現在の留日中華学生は大手をふって昔の文明的借金をとりにくる様な遠慮のない気もちで、楽しく安心して研鑽を続けられ、真に留学の目的を達成して貰ひたいと思ふ」[10]。

留学生を多く受け入れていた明治大学の「中華留学生係」[11] であったこの教員は、日本側は古代以来の「恩返し」をしているだけなので、留日中国人学生は、「遠慮」なく、「楽しく安心」に学ぶべき旨を説く。

なお、このような説明がなされた背景には、官憲や一部市民による中国人への偏見を解消し、留学生の緊張感を解きたいという大学教員の想いも含まれていたと筆者は考えている。たとえば1930年11月号の同誌に掲載された「学報部座談会」は、日華学会を運営する日本人と「留日学生監督処」の中国人職員が集ったものだったが、そこで「警官に対する悪感（ママ）」の存在が話題にのぼっていた。つまり、当時3,000名余の中国留学生が日本で学ぶ中、「日本の警察行政上已むを得ぬ次第かも知らぬ」が、「一廉の紳士のつもり」の彼等に、「望ましからぬ待遇をなすことの、徒らに其の反感を激発し、延いては日本全般に対する好感にさへ亀裂を生ぜしめ、為めに日本の失ふ処は、其の得る処より、遥かに大なるべしと想像される。此は日本の為めに計っても当分の願を煩はし度き点である」との厳しい指摘がされていた。

そもそも、この座談会は、銀価暴落に伴う留日学生の減少や両国の学制の違い、語学学習の問題などについての意見交換がされ、最後の六点目にこの問題が加えられていた。つまり、この時期の留学生教育者の間では、警察による留学生の「再三探訊」が、日本に対

する印象を悪くするので、極力留意されたいとの注意喚起がなされていたのである[12]。

（2）留日中国人学生の主張

『学報』には、日華学会経営の東亜高等予備学校生の日本語作文がしばしば掲載されている。さらに同誌1931年７月号は「学生の為めに、一には学生相互の観摩に資し、一には本国の父老に留学諸子の成績を紹介して、其の顧念を慰めんとの趣旨を以て、本号より特別欄を設けて、本校学生の習作を発表する」[13]と、積極的に留学生の作文を載せる由の告知が宣言される。

もちろん掲載された諸作文は、編集側の選択もあっただろうが、日本で留ぶ意義を前面に出す、好意的な内容が多かった。たとえば、「日本留学の目的」をテーマに掲げた女子学生の作文は次のようであった。「元来学問は研究すれば際限のないものです。人々は必ず学問をして智識を広め、品性を高めねばなりません。（略）日本は我中華国と、僅かに一葦（ママ）帯水をへだてて居る近い国で、且つ同文同種のみならず、日本の社会は安全で、人民は大概勤倹で、其の文化の程度も世界各国に劣らず、就中女に一番の国と考へて日本へ留学した理由です」[14]。

これは、先に見た同年１月号の「巻頭言」などの「アジア連帯主義的認識」の主張を承け、日本で学べる喜びを表わす模範的な内容と言える。

しかしながら、同じ７月号に、同様の枠組みを想定しながらも、数か月後の柳条湖事件を予見するような作文が掲載されていたことには注目される。「日本は民国と同種同文同洲の隣邦です。国際の関係は勿論密接であります。（略）欧米人は世界の主人と成りたいと思って居るでせう。それでは外の四種人種[15]は殆んど奴隷の様になります。だから、私達は国を鞏固にする為にも、中日の堅き結合を是非とも期せねばなりません。（略）日本は東亜の領国であります。東亜と其の他の各洲との平衡を保持するのは、日本の力である。（略）然し今日本の大陸政策は、ずんずんと中華民国に行はれて居ます。斯くの如くにして、将来国と国との感情は日に悪化しないだらうか。然るにこのやうな事は皆政府の無自（ママ）覚悟です。兎に角国民が政府を覚醒させねばならぬ。中華民国の国民と言ふ国民に対する同情心及び理解は、日本国民にかかる。（略）これから西洋の勢は、東亜にますます伸びるでせう。そうすると日本と中華の相互仇視が有ればいけません。日本が中国を侵略すると、特殊階級になり、実に国民の不利でせう」[16]。

この学生は、欧米人の支配を排するため、日中の「堅き結合」が理想かつ目標であると考えながらも、それを阻害しかねない状況が垣間見えていることへの懸念を率直に示している。またその主因は「日本側にある」と見ながらも、「民国政府を覚醒させるのは、自分たちである」という強い自覚を吐露している点に大きな特色があるだろう。

さきほど筆者は、『学報』に掲載された作文が「ほとんどが好意的な内容」と書いた。しかし、満州事変勃発以前から、『学報』は日本への批判を含意するもの、あるいは中国学生の政治意識を喚起させるような言説も折々ではあるが、公にしていたのである。そう

した編集姿勢は、「来日留学生の日常各般の斡旋に尽力することを主要な任務」としていた日華学会自体が抱いていた懸念に対する自覚的表明でもあったのではないかと考えている。

（3）日華学会による留日中国人学生への福利厚生支援

満州事変後以降における日華学会周辺の留学生をめぐる動向を見る前に、『学報』掲載記事から、同会による留学生の福利厚生面での支援をもう少し確認しておきたい。

まず、日華学会などが後援して行われた「中華留日学生作品展覧会」（1931年６月）についての報道である。「今回東京堂書店では、日華学会及泰東書道院後援の下に、中華留日学生作品会を催し、六月二十四日より三十日迄同店画廊に於て、留学生諸士の各種作品を展覧し、一面江湖の渇を慰すと共に、此等の芸術作品を通じて、留学生と日本との情感を更に深めんと試みたのであったが、果然内外の好評を博し、恰も毎日の雨天にも不拘、数千人の入場鑑賞があった。（略）出品点数は三百を超え、会場の狭さを感ずる程、盛況を呈した。作品に至っては、玄人を圧する如き傑作も少なくな（かった）」。[17]

筆者はかつて、東京高等工芸学校（現千葉大学工学部）で工芸図案（デザイン）を学んでいた中国人留学生が、帰国前の1933年、松坂屋で絵画作品の個展を開き、多くの人から「画伯」とまで称されたことを紹介した[18]。その事例も想起すると、「玄人を圧する」作品を創り出す芸術的センスに富む中国学生も少なくなく、かつ日本人もそれを高評する環境にあった。それを日華学会は支える役割を果たしていたのである。

一方、日華学会は、留学生が純粋に楽しめる課外事業も展開していた。その中で、人気だったのは、千葉県館山町（現館山市）での「銷夏団」である[19]。これは夏期休暇中、猛暑の東京で過ごす学生を休養させるため、1923年から、中華YMCA[20]との共催で始めた企画であった（「銷（消）夏」は、「避暑」に近い語である）。この銷夏団は、1941年までの19年間、館山町西浜の「沼」地区で継続され、日華学会が設置した宿舎に寝泊まりした学生だけで、毎年100名余。また宿舎を予約できなかった留学生は、民家の一部屋を間借りし、あるいは一軒をまるごと借家するなどし、数百名の中国学生が館山の地で、ひと夏を過ごしたのである。

満州事変が９月に勃発した1931年の夏も、７月15日から８月31日までの48日間実施され、117名（うち女性８名）が参加している。この年は、海水浴のほか、日本語講習、近隣学校などへの参観や遠足、さらには水野梅暁、岩村成允、何基鴻[21]の講演などが行われた[22]。『学報』1931年10月号に掲載された留学生の「忘れがたい体験」を複数紹介しておこう。

「夏休みを利用して、養生の為に早く、六月十六日から館山の西の浜に行きました。其時はまだ中華消夏団も当地へ来なかったので、毎日一人で頗る淋しい日を暮したのであります。病気で本も思ふ様に読まれず、それかと言って終日部屋の中に坐って静養する事は中々出来なかった。（略）茫々たる海水と薄墨色の遠山とを長く見て居ると、山水の清らかさが胸に迫って随分好い気持でした。

七月十五日になって、消夏団の人々は愈々来ました。（略）私の生活は益々面白くなり

ました。朝六時頃、海岸へ散歩に出て、料らず逢った友達と共に話しながら、波打際を歩いて居ると、朝陽の微熱や海風の爽かさは、無上の楽しみを吾人に与へて殆んど朝食を忘れた時もありました。朝食を食べて、八時になると、東亜学校の日語夏季講習に出席しました。九時半になり、家に帰って着物を脱ぐと、涼しい風が部屋を吹き通して実に良い気持でした。しかし、この夏休の間に一番楽しいのは海水浴でした。午後一時半頃になると、火の様な太陽は遠慮なく照り出し、実に堪へられない熱さでした。この時に水泳着を着て、爽かな海に這入り、浪を迎へてブリースト（引用者注―平泳ぎ）でも、クロールでも何でもいいので泳ぎました。世間に於てこれ程楽しい事はないと言ってもいいのでありませう。近頃、公園に鯉の泳ぐのを見る毎に、あの夏休みの海水浴が恋しいなと言ふ気分になります。嗚呼、来年の夏休みが待ち遠しい」。[23]

この学生は「病気養生」のため、銷夏団開設の１ヶ月も前から、館山入りしたと語る。日本における海水浴文化は、明治初年に「病気療養」の一環として始まるが、明治後期になると、学生に対する「心身の練磨」をおこなう教練的な意味合いが込められていく（また大正期以降は、レジャーとしての人気も出てくる）。一方、元来海水浴の習慣がなかった中国からやってきた留学生たちは、近代日本が西洋から学んだ文物の一つとしての海水浴を、課外の自主的活動として体験することになる[24]。そして、それは心身を鍛えようとする「教錬」ではなく、健康保持、あるいは心身回復の時間として受容されていったことが、この学生の作文から読み取れるだろう。

館山での海水浴体験について、同号に載った二つの作品の一部も抜粋しておく。

○「学校の夏休みは何時から始まったか好く覚えて居ないが、唯私は七月十三日に北条（引用者注―館山）へ行った事は、今でも忘れられない。（略）私は自分の不眠症と友達との約束に因って、（略）目的地に着きました。（略）私にとって海浜で夏休みを過したことは今度が始めです。故に私は毎日深い趣味を以て海岸へ行ったが、泳いだり漕いだりしない日はない程でした。若し海に波が荒くなったならば、私達は山に登ったり、遠足をしたりする時も少くなかった。

雨の降った時等は、家で易しい書物を読み、又面白い笑ひ話しに、其の日を早く過した。（略）私達は、四十日間の仕事を顧みると、勉強することが少なかったが、体や精神も以前より少し丈夫になって、顔も真黒くなった。私達はこれを海浜からの土産として東京へ帰りました」[25]。

○「八月十四日より北条に行きまして、毎日毎日海の生活をして暮らして居ました。泳の外に、既習の書物の復習もしました。（略）朝早く起きて海岸に行き、東の空を見て居ると、山の後から大きな赤い太陽が盆の様にだんだん昇って来る。西の方を見ると、富士山が扇子を倒さまにした様な形をして、遠く霞隠れに見える。その美しいこと、その立派なことは実に筆では記す事は出来ません。私は北条で約三週間位を過し、去る八月卅日帰京しました。」[26]

これら館山におけるひと夏の経験、すなわち午前中に日本語講習を行ない、午後は自由

に水泳し、健康を増強する。さらに近隣の自由散策など、一ヶ月余りを安価で過ごせる機会を、日華学会が提供していたことは、留日中国人学生に対する厚生事業として、特筆してよいだろう。

日華学会が関わった他の親睦企画の事例も加えておきたい。1931年３月には、「第１回日華学生連合ピクニック」（神奈川県金沢八景）が実施され、募集枠の50名を大幅に超える110余名の中国学生が日本人学生・役員30名とともに赴いている。満州事変が展開している翌年11月にも、紅葉の箱根への日帰り遠足が行われるなど、「交流」の機会を創出していたのである[27]。

２　満州事変の勃発に伴う留日中国人学生の動きと日華学会

（１）満州事変勃発と留日中国人学生の危惧

1931年８月31日、「銷夏団」が好評裏に終了した直後の９月18日、中国東北で、柳条湖事件が起こり、十五年にも及ぶ日中の戦闘が始まった。先に見た館山での海水浴体験が掲載されていた『学報』10月号に、「本月（引用者―1931年９月）十八日を以て、京都帝大留学中の本誌誌友某君より、左の如き一文を寄せられた。最近の日華国交に痛心さる同君の熱情を多とし、故に原文のまま紹介して、両国士人の参考に供し、以て日華親善の一助にし度いと思ふ」[28]という注釈付きで、日中関係の将来を懸念する留学生の文が掲載されている。

前掲した「ほのぼのした海水浴の思い出」の数頁後に掲載された「九月十八日」の日付を持つ文章は重い内容を持つ長文であった。しかし、京大で学んでいたこの中国人留学生が日本語で示した強烈なる意志表明、またそれを掲載することを「良し」とした学報編集部の判断を、ともに評価し、貴重な歴史史料として、以下にすべてを引用することとしたい。

「最近吾人が毎日の新聞を読むに当って、最も吾人の感情を刺戟するものは、日華両国間の国際問題に関する記事である。歴史的にも地理的にも斯く密接なる関係に在る日華両国の国交が無残にも、今日の如き支離滅裂な状態に陥った事は、洵に吾等両国々民の等しく堪へ難き耻辱であって、且つこの上なき大傷心事であらねばならぬ。祖先の遺業を受継いだ吾人が、試みに吾等の祖先時代に於ける両国の親交関係を追憶し、而して之を吾等の世代たる今日に於ける国交状態と思ひ較べる時、吾人は果して自責の念に打たれ、愁然として暗涙に咽ばざるを得やうか。

審かに考ふれば、日華両国の間には、毫も親善の可能ならざる理由の存在を見出す事が出来ない筈である。然らば斯くの如き現状は、果して何処に由来するか。私は敢へて断言したいものである。「今日の日華国交は、両国の利己欲深き軍人と政治家の致せし処なり」と。

顧みるに、我が国は最近百年以来、官僚と軍閥の極度な利己的行動に依り、国家乱れる事乱麻の如く、国は殆んど国たるを失ひ、従って国際的地位低下し、遂に友邦の軽侮を受けるに至るは、蓋し勢の必然たる処であって、正しく「国必自伐然後人伐之」に当嵌まる

べきであると言はねばならぬ。若し我国の国民が病源の所在を洞察せず、徒らに他国の行動に憤慨し、一時的感情に走って排外の直接行動に出づるならば、勢ひ両国民間の感情は之により益々悪化せられ、而もそれ以外には何等の効果をも収め得るものではない。かかる皮相の策は、我中華国民として、最も謹まねばならぬ処であると思ふ。

次に日本の情勢を見るに軍人、政治家の中のある者は、往々にして極端なる愛国思想を国民に鼓吹し、出来得る限り、友邦に対する国民の敵愾心を煽動せんとする。かくては日華国交の前日途は全く累卵の危に陥るべく、従って日華六億国民の平和も犠牲にならないとは限らない。

要するに、親善なる日華両国の国交は、今や間髪を容れざる重大危機に直面してゐる。吾等日華両国民に取っては、今こそ確乎たる自覚を持たねばならぬ時である。吾等は須らく、吾等の祖先以来の親交を保つべく、日華国交の改善、引いては世界平和への貢献に向って、勇往邁進せねばならぬ。終りに臨んで、私は日華親善に取って、最近新聞で見た典型的な二三のエピソードを紹介したいと思ふ。

（一）大阪の対華水災同情募捐事務所へある日、泥塗れになった一人の労働者が来て、片手で汗を振落し乍ら、片手で一円余の金を、事務所の受付へ差出して、寄付を申し出たと云ふ。

（二）ある日神戸のある町に、一人の少女が自動車に引かれて、頻死の重傷を負ったのを、通りかかった一人の華人銀行員が見て、同情し、早速彼女を病院に担込み、医師から輸血せねば彼女の救治覚束なしと聞いて、直ちに自身から輸血させて、遂に、彼女が無事なるを得たと。

以上の二つの逸話は、事小なりと雖ども、互に斯くの如き美しい精神を以てすれば、日華両国間の国際問題は何で解決し得ないものがあらうか。以上の事は、確かに彼の武力迷信者に一考させる価値があらうと思ふ。 一九三一・九・一八」[29]。

以上、「九・一八」の日付が深く刻み込まれたこの文章は、「親善の可能ならざる理由の存在を見出すことが出来ない」日中関係が、「無残」な状態に陥ったことを「堪へ難い耻辱」と嘆く。そして、その原因を作った両国の軍人と政治家を厳しく批判し、その一方で、民衆が互助の精神を発揮することが確実に「親善」に繋がってくることを示している。日本批判が明確に含まれている文章ではあるが、『学報』の編集子は、この主張に共感を持ち、読者に警世を与える意味で採用したと考えられる。

なお、（一）の「対華水災同情募捐」とは、1931年夏に中国・揚子江一帯で起きた大水害を支援する募金活動のことである。８月25日には渋沢栄一を会長とする「中華民国水害同情会」が発足し、広く日本の官民に義援金募集を呼びかけた。その趣意書は『学報』1931年９月号に、注釈付きで次のごとく掲載された。「今夏中華民国に於ける洪水の惨害は、現在迄に判明せる報道に拠れば、浸水面積略我が日本本土の広さに亘り、飢餓に瀕せる災民は一千万人に上ると伝へられ」る。「吾人は人道の本義に考へ、善隣の交誼に鑑み、之を黙視するに忍びず。茲に汎く天下の仁人に訴へ、普く義捐を募らんとす。冀くは、奮っ

て賛同せられんことを」[30]。

９月６日には、渋沢栄一がラジオを通じ、全国民に募金を呼び掛けた[31]結果、60万円の義援金が集まった。たとえば「宇都宮在の一農青年」が、「関東大震災の時は支那を始め全世界から多大の慰問品を受けてをりながら、今度の支那水害に対するわが国民の誠意のないことはなんとしたことでせう。こんなことで日支間の真円満、全人類の平和なぞといふことは到底望まれません。（略）甚だ些少ではありますが、私の微志を隣国の気の毒な人方に捧げればそれでいい」と述べたことが、新聞記事に採録されている[32]。

しかし、その義捐金の受け取りを、中国側は９月18日からの軍事衝突を理由として、拒否することになる[33]。京都帝大留学生が、両国の親善推進の端緒と考えた水害への人道支援活動が、日本で広がったのは事実である。しかし、中国側は、それをもって、軍事侵攻と相殺できるような代替物とは決して考えなかったのである。

このように情勢が悪化するなか、『学報』の11月号は、留学生による「中華国民」と題する文章を掲載した。そこで、「中華国民は世界上に於て最も偉大性に富む国民なり。この偉大なる国民性を養成せるは、決して一朝一夕にあらず。乃ち数千年来、先聖先賢の教化に陶冶せられて成りたるなり。現在は国勢弱けれども、此種の国民性は尚変らず」と書き起こされたこの文は、「中華国民の特質」を、「酷しく和平を愛する」、「度量寛大」、「礼譲を講ず」、「道義を重んず」、「勤倹」、「自由とは中華人民の生命」の六つにまとめる。そして、投稿者の結論は、「中華国の国民性を知るべく、且、中華は大国民の風あることを知るべし。此は皆中国数千年の文化に由って、之を養成する所なり。即ち孫中山先生（引用者注—孫文）のいはゆる「王道の文化」なり。ああ、誰か先聖先賢の遺沢の深遠なるを思はざらんや」であった。

これも「満州事変」という事態に直面した留日中国人学生が、苦悶の末にまとめた「国民意識」あるいは「自意識」の主張であることは確実であろう[34]。

（２）日華学会の留日中国人学生への対応

そうした中、『学報』は、1931年12月号に「中華民国留日学生監督処通知（十一月二十四日）」と題する告知を掲載した。「満州事変発生後、留日中華学生稍動揺したが、学生監督は恵心勉学すべく、帰国すべからざる旨、本国政府の指令に基き、十月三十一日付通告第三一号を以て、「留学生は継続求学すべく、若し勧告に聴かず、自由に帰国する者に対しては、今後は何等便宜を与へざる」趣、留学生一般に通告して、極力慰撫鎮静に勧めた結果、留学生数は激減したが、軽挙動揺する者無く、却て落着を見せてゐたが、事変の解決が進捗せず、最近は却て悪化の傾向あるに鑑み、監督処は学務会議商議の結果、此の際、便宜上従来の帰国禁止主義を緩和して、学生帰国を認容することとなり、十一月二十四日附監督処名義を以て、左の如き、非公式の通知を発した」と書く（この文の後に、中国語の通知が続くが、掲載は略す）[35]。

表向きは、「軽挙動揺する者無く、却て落着を見せてゐた」との認識を打ち出したかっ

たようであるが、結局、大量の帰国者を認めざるを得ないことの告白であった。

ところで、日華学会は留日学生名簿の作成を、自団体の重要な任務としていたのだが、同会学報部が発刊した『昭和六年五月現在　留日中華学生名簿』（1931年９月）を紐解くと、留学生数は作成時点で3,096名であった。ところが、事変後に発刊された『昭和七年六月現在　留日中華学生名簿』（1932年９月）によれば、「昭和六年度の在籍学生三千九十六名に対し、本年度は一千四百二十一名なり。此の減少は主として時局の影響（引用者注-満州事変の勃発）による（重籍者二十一を控除せば、正味在籍数千四百名）」とされた。さらに、『昭和八年五月現在　留日中華学生名簿』（1933年８月）には、「本年は千四百十七名にして略増減なし。右の内重籍数六十及休学帰国等にて登校せざる学生約百五十を控除せば、正味留日学生は千二百名内外なるべし」と、1,200名にまで減少したことが報告されていた[36]。

1934年以降の中国人留学生数の変遷については、「おわりに」で触れることとし、以下では、『学報』誌が、満州事変勃発で動揺する留学生にどのような対処をしたのかを見て行きたい。

事変後３カ月余りが経った1932年１月号には、外務省文化事業部長・坪上貞二による「年頭の所感」が掲げられていた。その冒頭は「今回の満州事変は誠に遺憾な出来事でありまするけれ共、中日両国関係にとって、極めて重大事であります。禍を転じて福となし、降って地固まると言ふ様に、此の事変を機縁として、両国の関係が完全に整調せられ、東亜の平和並に両国民の福祉が維持発展せらるる様になる事を希望して止まない次第であります」と、「事変」が早々に終結し、両国関係が結果として緊密になって欲しいとの希望的観測の吐露から始まる。

それに続けて、坪上は、日本国民として、「問題の一解決に努力しなければならない」が、政治外交経済面以外に、「文化方面より、両国の関係を律する事が必要」と強調する。そして、欧米社会が「機械的文明、個人主義文明の行詰りを感じ」、その解決法を「東方精神文化に求め様として居る時、文化系統を等しくする中日両国民が提携共力して、東方個有文化を研究発揚すると言ふ事は、両国民当然の責務でありまして、東方が一体となって、世界人類文化の向上発展に貢献すると云ふ事は、吾々にとって最も崇高なる使命である」と断じた。それに加え「日華学会は予て、中日両国の文化関係に努力して来られたのでありますから、如上の精神を以て、更に両国の文化関係に一層の努力を払はれる様に期待して止まぬのであります」[37]と、同会への期待を表明する。つまり、外務官僚の坪上は、満州事変の行く末に楽観的な見通しを持った上で、「中日両国民が提携共力」すべき旨を主張するのであった。

興味深いのは、坪上の主張の一部と重なりながらも、現実として厳しい言辞を突き付ける留学生の作文が、同じ１月号に掲載されていることである。日本語修得途上の学生ゆえ、覚束ない表現も多々見られるが、訂正をせず、「ママ」を付さずに、そのまま紹介する。

「元来人類の社会の組成は相持のものです。それ故残酷な戦争だの侵略の暴行だの不親

切だのと、皆人の道の外の仕事です。中華民国と日本とは、実に密切に隣国と言ふ。両方の間は僅か一葦（ママ）帯水の隔離である。又同種同文の国であった。両方の間に眉睫脣歯の関係を吾々は早や知りました。前数年から中日親善の言葉は盛に流行する事とその言葉は、今私の耳そばに猶存する様です。その合理の親善の行為を私は考へる時に大層感心します。

しかし、今東亜の不景気の風雲は再度緊張になった。和平の前途が荊棘の如く突生することと、私の心地にはなかなか不機嫌であった。この仕事の発生することは、両国の感情を破産する時と、全く両国の政府と外交の不調和政策が起されてゐる。両国国民の衝突ではありません。

吾々は東方の同種の民族ですから、東方和平の健全は両国の親切相持の態度を頼って成りませう。同時に両方の間で感情を調和して、之を実行するべきである。

私の最後の希望は両国の国民を団結することと、又は両国が共存共栄の関係を確立すると言ふ事は、最も急務であると言はねばならぬ。又吾々は一生懸命に仕事を進行させねば目的地に達しません。それから両国の前途の光明が、必ず希望を有することが出来ませう」(38)。

この学生が、両国の「共存共栄」確立が急務と述べる点は、坪上の主張と重なる点もある。しかし、「人の道の外」の「侵略の暴行」、また「東亜の不景気の風雲」などの文言を明確に用いており、直接的ではないが、日本の軍事行動を批判的に見ていることは間違いないだろう。文章に拙さはあるが、読者―その多くは「日本語圏」の人に、自らの理想を必死で伝えようとする行為は胸を打つものがある。先にも同様な指摘をしたが、学報が、大きな手直しをせず、この作文を掲載したことは、その内容に共感するところがあったがゆえと想像している。

（3）留学生による「黄色人種連携」の提案

1932年３月号に「留学生の声」として掲載された「黄色人種の将来」という作文(39)は、前節でみた「理想論」を超越し、「人種戦争」という観点から満州事変を捉えようとする。

「東洋の平和に一暗礁を惹起した満州事変は、最早五箇月も過去った。吾人は事の曲直是非を言ひたくはない。――然もいふだけの見識の持ってゐない筆者。ただ、この中日両国民に取り、最も不祥なるこの満州事変の影響を述べて見たい。過去の五ヶ月は中日両国同胞の腥さい血で染めつくした。毎日の新聞は何処何処を殲滅したとか、誰誰が名誉の戦死を遂げたとか等の、悲惨な報道に充満されていた。その殲滅といひ、その名誉の戦死といひ、これは皆黄色人種でした。白色人種一人もおらないことを両国人士は、つくづく考えねばならぬ所だと思ふ。連盟理事会の開会は一度毎に中日両国の衝突を拡大し煽動した。今やその惨禍は上海まで及ぼした。彼等白色人種はあらゆる挑唆の能を尽して、中日両国の衝突に油を注ぎ、そして彼等互に対岸の火災視して、こっそり笑ふのであった。（略）彼等は中日両国の衝突を利用し、彼自国の経済的恐慌を救はうとした。日貨排斥の結果、欧米各国の貨品が替って、長江沿岸各市場に充満せるを見給へ。甚しいのは両国に武器を

供給してまでも、衝突の拡大を煽動した。（略）白色人種の心理は、概して皆この例から除外されないだらうと思ふ。イギリス然り、アメリカ亦然り。

今や東洋平和破壊の危険に直面しつつあるのだ。吾等中日両国民は、この重大なる時期に当って徒らに盲目的偏狭なる愛国心に囚はれ時ではないことを。否、その盲目的偏狭な愛国心こそ、その国を危くするものである。平心坦壌同存同栄の真諦に基き、東亜の前途の狂瀾を既倒（ママ）た換さねばならぬ。（略）私は悲む。今度の中日衝突が正常に迅速に解決しない限り、中日両国民の衝突は、永久に絶えざることを。（略）この重大なる時機に、私的感情に走ってはいけないことである。国は愛すべきであるが、国を愛する為めに、国を滅ぼすやうな愛国をしてはならぬ。中日両国が戦ひに戦ふて、戦疲れ切った揚句、白色人種の一弾きにより、黄色人種が滅びるであらう。白色人種は将に、漁夫の利を収めやうとすることを、私共は看破せねばならぬ。日本は列強の一である。黄色人種を指導する責任は最も重いのである。（略）黄色人種が互いに殺合ってゐては、東洋の前途には、もはや光明は無く、早晩白色人種の為めに、土地は占領され、人民は彼等の奴隷となるであらう。悲時の士等よ！。一刻も東亜の惨慄すべき風雲を静め、黄色人種百年大計を樹てようではないか！。未来の戦争は黄色人と白色人の種族の戦争ですよ！」。

引用箇所をだいぶ絞ったのだが、ここも相当な長文になってしまった。投稿者の主張は、両国衝突の背景に、白色人（国際連盟理事会など）の奸計があったと見なし、「種族の戦争」に向け、黄色人種は団結すべきという点にあった。これは「黄禍論」批判に基づく日中連携論で、後世から言えば、日本を免罪する論理、例えば「大東亜戦争肯定論」的議論に転ずるものでもある[40]。その意味では、留学生の真摯さは認めながらも、危険な陥穽を有する論と筆者は考える。ただ、その一方で、「中日両国同胞の腥さい血で染めつく」すような無益な戦いは止めるべき、という主張は、往時においては明確な「日本批判」であったと言えるだろう。

（4）1930年代初頭における「留学生教育」の方向性をめぐる問題提起

1932年１月号の『学報』誌は、「愚公山を移す？―留学生教育所感―」と題し、満州事変後の留学生や教育者が直面していた問題を、「D　鈍感先生」と「B　敏感青年」との対話形式で示す論考を載せた[41]。この仮想対談は、「帰国留学生の多くが反日運動に関わる」など往時の留学生や留学生教育をめぐる認識をリアルに焙り出していると考えるため、「要旨」をまとめて示すのではなく、対話の面白みを残す形での直接引用を行なっていきたい。

なお、「鈍感先生」との名づけは、周囲の状況が理解できない（と見なされている）「鈍さ」を自虐的に示している点にあるようだが、実際は「正論」を堂々と述べる日本語教師（東亜予備学校教員）として造形されている。一方、「敏感青年」は中国人留学生のことを指すのかと思いきや、「船成金」にならんとするかつての教え子（日本人）として設定されている点も興味深い。以下、同誌上で五頁にもわたる対話の中から、主なものを抽出していくが、話題の流れに従い、（ア）から（エ）の四つの範疇に便宜的にまとめ、それ

ぞれに筆者のコメントを付す形としたい。

（ア）

（前略—満州事変後、東亜予備学校に残留している学生が百名程度である[42]と、Dが述べたのに対し）

B　さやうですか。でも、今日の場合、まだそれだけの学生が留まってゐるといふのが不思議ですネ。国が国だけに事変など無関心でのん気な所もあるのでせう。

D　のん気といふのですか・・・。さうも感じられませうが、しかし、此の頃支那を視察して来た人の談を聞くと、こちらで、一般の人がこれまで観祭し想像してゐた所とは、可なり懸隔があるさうですヨ。教育の上でも、実業の上でも、国民思想の上でも、この二三十年来恐るべき進展だともいはれてゐますヨ。

B　でも、あれほどの救国運動で、やいやい言ってる一面に、少数の学生でも、かう落着いてゐるといふ所は、少し変ってゐるではありませんか。

D　サア。変ってゐるには可なり変っていますナ。しかし、私に言はせると、我が同胞には、今少し大国民の襟度があってほしいのです。あまり性急で、また、あまり物ごとにこせつく様では面白くない。元来、支那と日本とでは、国情がちがふのです。近頃帰国した学生でも、其の多くは、色々の事情から余儀なく帰ったので、出来るなら落着いてゐて、学生は学生としての勉強を続けたいと思ってゐた者が、可なり多かったかと考へられます。で、今百人足らずでも、残った学生達が、落着いて勉強してゐる心理には、大に見るべき所があると思ひます。何かといへば、わっと騒ぎ立てる。その癖、利己本位で、大にのん気に構へた点もあるといふ様に見るのは、支那といふものの研究が、まだ足りないのでせうか。

［（ア）についてのコメント—中国の若者は「救国運動」で騒いでいるだけと、偏見的に捉える「敏感青年」の認識を、先生は「日本人には大国民としての襟度（広い度量）」が必要と返す。さらに、ここ二三十年で中国が諸方面に「恐るべき進展」をしていること、新たな知的地殻変動が起こっていることを、伝えようとしている点にも注目される。］

（イ）

B　先生は支那学生の方に、なかなか大国民の量があるとのお考へですか。留学生教育に従事していらっしやる先生方の立場としては、さうお考へになるのも御尤と存じます。それはまづさうとして、世間では、日本が支那の学生を教育する目的はいづれにあるか。現に日本に対して、反抗してゐる重な人々は、大概嘗て日本の教育を受けた人々ではないか。学生団の騒ぎでも、日本から帰った学生連の殆どすべてが参加してゐるではないか、といふ様な論を耳にするが、先生の留学生教育に対する此等の御見解はいかゞですか。

D　なるほど、世間にさういふ論をする者が可なり多い様であるが、私は、今少し、眼を高くして見て貰ひたいと思ふ。そんな論が出るのも、やはり日本人の性急な所からで、

教育の効果をすぐ眼前に見ようとする。すべてのことを実利に実利にと訴へて来る。（略）日本に留学したものが帰って行くと、直に排日家になるといふ。それはないではありません。しかし、そこにはなほ、研究して見なければならない色々な事情があるかと思ひます。中にも支那の学生青年を今日の情勢に導いたものは、主としてあちらの学校教育の結果だと見てゐる人が多い様であるが、かかる教育奨励の起りは、どんな人々のどんな魂胆からであるか。学生青年のためには、寧ろ同情すべき気の毒な事情があるのではないか、とも考へられるのです。（略）大概、争ひといふことは利害関係の深い所に起り易いのです。相接近した間柄に起り易いのです。（略）

B　でも、その交際といふものは、何も結果の悪くなる教育によらなくてもいいではありませんか。美術方面もあれば、スポーツ方面もあり、観光遊覧といった様な方面もあるのです。現に、教育方面では、すべてが失敗してゐるのではありませんか。

D　大分端的な論鋒ですナ。君のお考へでは、教育された者が教育した者に反抗して来るのは不徳義である。破門せねばならない様な弟子は、初から取らないがよいといふにある様ですナ。それはあまり旧い考へ方ではないでせうか。私は見方によっては、日本で教育された者が、今日枢要な地位を占めて、排日運動でも何でも牛耳るほどの要路に働いてゐるのは、やはり一面に於ける教育の成功かと思ふのです。縁なき衆生は度し難し。反抗の裏面には、また親昵といふことも認められないではないです。留学生教育といふごときものは、我が東方文化の発展から、延いては理想的世界文化の浄成といふごとき、一段二段三段高い所から、考へて行かなくてはならないものと考へます。

［（イ）についての筆者コメント―中国人には「大国民の（度）量」がないため、帰国後、日本批判を展開するのだと、「敏感青年」が批判的に見ているのに対し、「鈍感先生」は、「理想的世界文化」を創り出すための留学生教育の成果は、拙速に計り得るものでなく、大所高所から捉えるべきと諭している。つまり、教育において「速成的な効果」を求めることの愚かさを伝えようとしているのだろう。］

（ウ）

B　日本に留学する学生の頭には、先生のお考へになってゐる様なものは、毛頭無いかと思ひます。彼等はただ、英・米・独・仏等に留学するよりも、日本に留学する方が経済であり便利であるといふだけで、彼よりも一歩先に西洋の科学的文明を取り入れた日本から、それを安価に買って行かうといふだけのことでせう。

D　そのお考へは恐らく中ってゐるでせう。私もさうおもひます。しかし、学ばうとして来るならは、これをそらさず導いて行き、共に研究しようと寄って来るならば、快く共に研究して、広く正義人道の上に立脚し、少くとも、東方文化の向上といふごとき見地から、立派な人間を造出すといふ理想は、やがて、国と国との交りをも、人と人との間をも、円満に握手される様になる。これが順番な筋道でありませう。はじめから、彼と我との境をおいて、我が与へただけのものは、彼から取らなくてはといふ様な考

へなら、それは教育でも文化でもなく、一つの功利的商売的計画です。日支親善を共存共栄と言ひかへて見た所で、此の根本的方針が立たなくては駄目です。ここから割出して来ると、日本に留学した者が、今日日本に反抗して居るなどいふ論が、いかに幼稚であるか、わかると思ひます。

［（ウ）をめぐるコメント―「敏感青年」は、ここでも留学生のことを「功利的商売的」と捉え、批判的視線を示す。一方、先生は、そうした側面もあるが、日本側の認識を改めないと、「東方文化の向上」という究極の目的に達することができないとの正論を吐く。］

（エ）

B　なかなかゆっくりとした先長い御考へですネ。… いやさうなくては、かういふ教育などやっては居られますまいネ。… だが、此の形勢で、当局の方から意外なひびきでも来る様な恐れはありませんか。

D　それはわからないです。しかし、かういふ処では、学生が時に五百人、七百人、千人と殖えることもあり、時に五十人、七十人はおろか、五人、七人に減ることもある。それで、苟も局に当ってゐる人々には、はじめから此等の消息は、よく理解されてゐるものと思ってゐます。ともあれ、私は、あまり取越苦労はしない方ですヨ。ハハハハハ。やはりのん気ですかナア。かうやってゐると、自然に気分まで同化して仕舞ふのかも知れないナ。昔の支那人にも愚公山を移すといふ寓話がある。私の留学生教育主義は、言はば、この愚公の真似だらうナ。… 少なくとも、目前の利を是れ計る様な…。（略―ここで授業開始を知らせる鐘が鳴る。二人は別れ、Bは街に出て、Dは教員控室に入る。）

B　口の内で―　先生も結局留学生教育で、一生を過すのかナア。まあおめでたい。あれで長寿が出来る方だらうナア。

D　も口の内で―　これは、留学生教育に没頭してゐるばかりではいかん。どうもああした日本の連中から、大いに導いてかからなくては駄目だ。（この一言で、仮想問答は終わる）

［（エ）についてのコメント―「敏感青年」は、「当局の方から意外なひびき」が来ないかとの懸念を示す（この「ひびき」は、何らかの干渉を想定していると思うが、詳細は不明である）。それに対し、先生は、「愚公山を移す」の故事を引き合いに、「のん気」と言われようが、「目前の利を計るような」留学生教育をするべきでない旨を宣言するのである。］

この仮想対談についてのコメント（アからエまで）は繰り返さないが、それにしても「鈍感先生」との名付けにも関わらず、留学生や日中関係の「理想」に寄り添おうとする教員の強い意志が浮き彫りになる構成を持つと筆者は理解した。とりわけ、「敏感青年」の最後の発言が、先生を揶揄する形の捨てセリフとして終わるのに対し、「鈍感先生」は、そうした短絡的思考しか持てない「日本の連中」の再教育を果たすべきと、強く語っている

点は、意味深長である。

この仮想対談の筆者は「山石槌」と明記されているが、筆者が誰かは現状では判然としない。しかし、これは、『日華学報』の編集者が、あるいは東亜高等予備学校の教壇に立つ人々が、往時の日本人による「中国人（学生）」に対するステレオタイプ的思考の歪みを鋭く抉り出そうとしている試みと、筆者は考えたい。

『日華学報』誌が掲載した論説や会の活動を、満州事変期のみに焦点を絞って見ると、関係者が、留日学生の教育や福利厚生活動に力を注ぐことで、「日中提携という理想」を果たすため努力していた様子が窺える。また事変勃発後は、留学生の心情に可能な限り寄り添う形で、問題解決に近づくための腐心を試みていたように思える。その表れの一つが、たとえば中国留学生が戸惑いの中で書き上げた日本語作文を、そのままの形で掲載し、日本語を解する人たちに問題提起をしようとした姿勢に繋がったのではないかと考えている[43]。

おわりに

満州事変で急減した中国人留学生数は、その後どのような推移をたどったのだろう。表１に、1930年から1943年までの留日学生数を、中華民国、「満州国」、総計に分けて示した（「満州国」建国前は東北三省からの人数を抽出してあげた）。満州事変勃発後、中華民国留学生数が1,000名弱にまで減少したことは本文中で触れたが、その数は、1934年から漸次回復し、1936、37年には4,000名にまで膨れ上がる。しかし、盧溝橋事件から始まる日中全面戦争によって、中国人留学生数は1,500名余りにまで減少し、以後、敗戦まで1,000名台で推移していくことになる。

表１　中華民国・「満州国」の留日学生数（1930～43年）

	中華民国	「満州国」	総計
1930年	2351	698	3049
1931年	2256	716	2972
1932年	1083	317	1400
1933年	1043	314	1357
1934年	1411	757	2168
1935年	2588	1269	3527
1936年	4083	1867	5934
1937年	4009	2017	403

1938年	1508	1519	3132
1939年	1023	1325	2327
1940年	1204	933	2137
1941年	1466	1256	2722
1942年	1341	1220	2561
1943年	1380	1004	2384

【出典　日華学会学報部編『留日中華学生名簿』各年版/駐日満州国大使館編『満州国留日学生録』各年版】

本稿は、満州事変勃発を挟む1930年７月号から1932年１月号まで（つまり一年半余り）の『日華学報』誌に見える日華学会側の意向（論説など）と留学生の見解（作文など）を照らし、その内容を検討してきた。「友好親善」の未来がまさに大きく揺らいでいくこの時期に焦点を当てる事で、学報側が、また留学生側が、従前からの「日常」を保とうとしつつも、それぞれの立場からの懸念や戸惑いを露出させていく場面を確認することができた。

この時期の学報の論説は、もちろん国家意志に従う主張も多かった。しかし、中国留学生に寄り添おうとする議論も掲載し、それをもって日中両国の関係者・読者に問題提起を行なおうとした意志もあったのではないだろうかと考えている。

本稿で対象にした時期以降、すなわち1932年３月の「満州国」建国、1937年７月からの日中全面戦争の展開、占領地での傀儡政権の樹立など、政治的局面が急速かつ大きく転じていく状況を、『日華学報』がどう認識していくのかの精査は、引き続きの課題となる。

一方で、『日華学報』誌以外における留学生の発言も、可能な限り合わせ見て、議論を相対化していく作業ももちろん必要になってくる。1935年７月から1937年５月にかけ、留日中国学生が中国語で独自に編集し、東京で発刊していた『留東学報』という雑誌がある。同誌と『日華学報』との簡便な比較を筆者はかつて行ない、『留東学報』が急進的拙速な日本批判に走らず、日本の近代史や民族性の特色を中国語で真摯に叙述しているのに対し、『日華学報』は直感的感想や簡単な言及が多いとまとめた。しかし、慣れない外国語（日本語）で、日本人に訴えかけようとした留学生の真意や熱意を評価すべきとも述べた[(44)]。その時の議論の可否を含め、他の雑誌媒体などとの比較作業の深化も大きな課題となる。

［付記］

本研究は、2020～22年度 JSPS科研費基盤C・一般（20K02508）「1930～40年代日本における中国人留学生教育」の助成を受けた成果である。

注

1　砂田實編『日華学会二十年史』日華学会、1939年、５頁。阿部洋『「対支文化事業」の研究』汲古書院、2004年、また見城「渋沢栄一による中国人留学生支援と日華学会」（町泉寿郎編『渋沢栄一は漢学とどう関わったか』ミネルヴァ書房、2017年などを参照。

2　砂田は、前任者の山井格太郎が満鉄嘱託に転じたのを承け、1931年７月に常任理事に就任。その履歴としては1903年愛媛県留学生として、上海の東亜同文書院に入学。1906年卒業後、日本棉花会社に入社。1930年７月まで勤続し、上海、漢口、天津などで勤務を重ね、また天津では商工会議所会頭や民団副議長などを歴任している。そのため「対支経験と識見とは日支の文化提携の上にも必ずや大なる貢献を齎すであらふ」との期待がかけられていた（「常務理事の更迭」『学報』26号、1931年８月、37頁）。

3　砂田實「就任の辞」『学報』27号、1931年９月、33頁。

4　細川護立（日華学会長）「新年の辞」『学報』1931年１月、４頁

5　大里浩秋「『日華学報』目次」『人文学研究所報（神奈川大学）』38号、2005年。

6　復刻版に筆者が書いた解説は「『日華学報』にみる留日中国学生の生活と日本認識」（大里浩秋・見城悌治・孫安石監修・解説『日華学報』（復刻版）第16巻、ゆまに書房、2013年）である。それ以外に、筆者は『日華学報』を用い、「太平洋戦争下における留日中国学生の夏季錬成団」（『人文研究（千葉大学）』42号、2013年、や「1940年の「中華民国留日学生会」と日華学会」『中国研究月報』800号、2014年、などを発表している。

7　戦前戦中期の中国人医薬留学生を支援した日本の団体に、1902年に設立された同仁会がある。筆者は同仁会をめぐる研究も行っているが、戦時下留学生の動向に関わる拙稿の一つとして「日中戦争開戦前後における日本医学界の中国・中国留学生観―医薬支援団体「同仁会」の機関誌に見える言説から」『人文研究（千葉大学）』51号、2022年、を挙げておく。

8　『学報』14号、1930年７月、１頁。

9　『学報』19号、1931年１月、１頁。

10　師尾源蔵「明治大学に於ける中華学生」『学報』14号、1930年７月、66頁。師尾については、山泉進「『日華学報』に掲載された師尾源蔵の明大留学生に関する文章」『大学史紀要』18号、2014年、明治大学大学史編纂所、山泉「師尾源蔵と経緯学堂」（高田幸男編著『戦前期アジア留学生と明治大学』東方書店、2019年）を参照。

11　師尾は『学報』19号（1931年１月号、50頁）に「明大横田学長中華視察記」を寄稿しているが、その時の肩書は「明治大学講師　中華留学生係」であった。

12　「学報部座談会」『学報』18号、1930年11月、62～64頁。

13　「東亜高等予備学校」『学報』25号、1931年７月、32～33頁。

14　凌智（東亜学校予科第二班）「日本留学の目的」『学報』25号、1931年７月、34～35頁。

15　1938年に発刊された加田哲二『人種・民族・戦争』（慶應書房）は「科学的に明確なことをいふのは難しい（４頁）」としながらも、ブルンメンバッハ（ヨハン・フリードリヒ・ブルーメンバッハ：ドイツ：1752～1840年）が、皮膚や顔面角などの比較から「コーカサス人　白色人種」、「モンゴル人　黄色人種」、「アフリカ人　黒色人種」、「アメリカ人　銅色人種」、「マライ色　褐色人種」の五人種に分類をしていることを紹介している（17～18頁）。中国留学生がこの「知識」を得た場所が、日本か中国かは不明だが、当時流通していた「一説」を踏まえたことは間違いない。

16　孫白琳（予科第一班）「雑感」『学報』25号、1931年７月、36～37頁。

17　「消息　中華留日学生作品展覧会」『学報』25号、1931年７月、49頁。

18　これは、戦前戦後の中国における美術教育者として知られた高希舜（1896～1982）の事例である（見城『留学生は近代日本で何を学んだのか―医薬・園芸・デザイン・師範』日本経済評論社、2018年、177～178頁）。

19　前掲『日華学会二十年史』67～69頁。

20　渡辺祐子「もうひとつの中国人留学生史―中国人日本留学史における中華留日基督教青年会の位置」『明治学院大学教育研究センター紀要カルチュール』５巻１号、2011年。
なおYMCAは、日中戦争勃発により帰国し、38年からは日華学会の単独開催となる。

21　水野は、本願寺の僧侶。仏教を通じた日中交流に努めた。岩村は、中国やベトナムの歴史研究者。何は、東京帝大で法律を学び、帰国後、北京大学、清華大学の教授を務めた。

22　前掲『日華学会二十年史』69頁。

23　劉鴻忠（東亜学校専修科）「夏休み」『学報』28号、1931年10月、37～38 頁。

24　見城「近代千葉における中国留学生と海水浴体験」『千葉史学』60号、2012年５月。

25　胡樹桐（同校専修科）「夏休みを如何に過したか」『学報』28号、1931年10月、39 頁。

26　顧徳増（東亜学校専修科）「夏休み」『学報』28号、1931年10月、38 頁。

27　「第一回日華学生連合ピクニック」『学報』1931年４月、94頁。「東亜予備校秋季遠足会」『学報』1932年12月、31頁。

28　「消息」『日華学報』28号、1931年10月、52～53頁。

29　京都帝大IST生「所感」『学報』28号、1931年10月、53～54頁。

30　「中華民国の水災と義賑」『学報』27号、1931年９月、36～38頁。

31　渋沢は1920年には数ヶ月ながら日華学会会長に就いている。なお、ラジオ演説の２ケ月後の31年11月11日に逝去している。

32　「涙ぐましい水災への同情/渋沢会長の放送に感激/同情会への大口小口の寄附」『中外商業新報』1931年９月11日付（『渋沢栄一伝記資料』第40巻、78～79頁）。

33　「隣邦の難に集る水災同情六十万円/支那側の受理絶望と見て深尾男今朝引揚げか」『中外商業新報』1931年９月26日付（『渋沢栄一伝記資料』第40巻、99頁）。

34　趙煥章（東亜学校専修科）「中華国民」『学報』29号、1931年11月、34～36頁。

35　「中華民国留日学生監督処通知（十一月二十四日）」『学報』30号、1931年12月、36頁。

36　すべて各巻の巻頭に掲げられた「例言」による。

37　坪上「年頭の所感」『学報』1932年１月、１頁。

38　陳東帆（予科一組）「読『日本全国小学教員会要訳』後感」『学報』31号、1932年１月、32～33頁。

39　C・K「黄色人種の将来」『学報』33号、1932年３月、37～39頁。

40　黄禍論とそれへの日本の対応については、橋川文三『黄禍物語』筑摩書房、1976年、また飯倉章『黄禍論と日本人―欧米は何を嘲笑し、恐れたのか』中公新書、2022年、などを参照。

41　山石槌「愚公山を移す？―留学生教育所感」『学報』31号、1932年１月、38～40頁。

42　事変後に発刊された『昭和七年六月現在　留日中華学生名簿』（1932年９月）によれば、前年179名在籍していた東亜高等予備学校の学生数は、1932年６月段階でたった15名に減っている。前掲した仮想対談の創作が、1931年の年末になされたものとすれば、鈍感先生が言う「100名程度」という数は、大幅減少過程の段階的な数値かと思われる。

43　1931年８月号から38年10月号まで、『日華学報』の編集を担当していた一人は高橋君平であった（1927年の創刊時も編集に関与していた）。この高橋は、1927年11月から30年夏まで、北京に駐在し、中国の教育情報を『学報』に投稿するなどしていた。よって、本稿が扱った時期の編集方針に、高橋が

少なからぬ役割を果たした可能性もあるが、詳細は今後の課題となる（陳珂琳「日華学会の中国における活動―北京駐在員高橋君平の事例を中心に」（孫安石・大里浩秋編『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』東方書店、2022年）。

44　注６で示した見城「『日華学報』にみる留日中国学生の生活と日本認識」456～459頁を参照のこと。